

清・張自超の『春秋宗朱辨義』について（下その2）

On Zhang Zichao's Chunqiu zong Zhu bianyi (Distinguishing the Meaning of Spring and Autumn Annals following Zhu Xi)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

「七 『春秋』は齊の桓公・晉の文公の覇功を明らかにするものである。齊の桓公・晉の文公の功績は、楚を打ち払ったことにある。朱子が「齊の桓公・晉の文公が周室に功績があったというのは、[以下のような理由による。それは、] 當時最も強大であった楚が、鄭を攻撃したが、鄭は王畿の内に在り、齊の桓公・晉の文公が楚の勢いを挫かなければ、周室は楚に併合されたであろうことにある」と言っていることからすると、『春秋』は楚を中華の国として認めようとしなかったのではないか。

楚 初めは荆と稱し、漸くにして人と稱す。既にして楚と建號し、而して君 漸く爵を擧げ（『朱子語類』卷八十三・春秋）①、大夫 漸く名を稱す。諸儒 其の來聘するに於いて、則ち「義を慕いて來りて之に進む」②と曰うなり。其の人と稱し・爵を擧ぐるに於いては則ち「漸進」③と曰うの義なり。夫れ『春秋』の作らるるは、^{もと}原より以て二伯（齊の桓公・晉の文公）の功を著わす④。二伯（齊の桓公・晉の文公）の功は、楚を攘うに在り。而して顧だ楚の君・臣と内の諸侯・大夫とを齊等に進めんや。蓋し楚は戎狄の比に非ず。戎狄 内地に在りと雖も、患を爲すこと小し、故に其の君 必ずしも詳しくせず。楚は亦た秦の比に非ず。秦 周爵もて伯（霸）を稱す⑤と雖も、中國の患と爲らず、故に其の大夫 必ずしも詳しくせず。楚 亦た呉の比に非ず。呉 驟に強しと雖も、春秋の將に終らんとするに起く、故に其の君・大夫 皆な必ずしも詳しくせず。惟だ楚は則ち中國と

始終 敵と爲り。其の君を爵せず、其の大夫を名いわざらしむるは、則ち楚の患を爲す。中國 其の實 著われず・楚の實も著われざれば則ち二伯（齊の桓公・晉の文公） 相い繼ぎて楚を攘うの事跡 著われず・楚の時に強く・時に弱きも亦た著われず、而して晉の世々伯（霸）の盛んなる有り・衰える有るも亦た著われず。朱子 曰く、「齊の桓〔公〕・晉の文〔公〕王室に功有る所以の者は、[以下のような理由による。それは、] 當時 楚最も強大にして、時に復た兵を鄭に加うも、鄭 王畿の内に在れば、向に桓〔公〕・文〔公〕の以て之を遏むに非ざれば則ち周室 其の併せる所と爲ればなり」（『朱子語類』卷八十三・春秋），と。然らば則ち『春秋』は豈に楚を進めんや⑥（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・十葉）。

①『公羊傳』「〔莊公十年〕 秋九月，荆敗蔡師于莘，以蔡侯獻舞歸」条に「荆とは何ぞ。州の名なり。州は國に若かず。國は氏に若かず。氏は人に若かず。人は名に若かず。名は字に若かず。字は子に若かず」。また、『朱子語類』卷八十三・春秋に「荆楚初書國，後進稱「人」，稱爵，乃自是他初間不敢驟交於中國，故從卑稱。後漸大，故稱爵。賀孫。莊十年」。

②『春秋胡傳』卷十二・僖十八年「冬，邢人狄人伐衛」条に「狄稱人進之也，慕義而來，進之可也」。

③『公羊傳』隱公元年「三月，公及邾婁儀父盟于昧」の傳に「此其爲可褒奈何，漸進也」とあり，何休注に「漸とは，物事の端 先ず見るの辭なり。惡を去り善に就くを進と曰う。譬えば隱公 命を受けて王たりて，諸侯 倡始し先ず之に歸す者有れば，當に進みて之を封じ，以て其の後を率いるべきが若し。〔「漸」といい〕「先」と言わざる者は亦た褒むる所を爲す者の法なり。明らかに當に積漸して，深く聖徳の灼然たるを知るの後，乃ち往くべし。造次にして不義に陷る可からず」。

④『春秋』の作るは：『春秋宗朱辨義』卷三・莊公・「〔莊公十年〕 秋九月，荆敗蔡師于莘，以蔡侯獻舞歸」舞。『穀〔梁傳〕』作「武」 条に「荆の初めて

經に見ゆ。而して其の事は則ち蔡師を敗り、蔡侯を虜とす。甚だしきや、荆の強くして暴なること。故に此れより前の「敗鄧」・「敗鄭」・「伐羅」・「伐隨」は書せず。蔡を敗り、又た其の國君を虜とするに至り、『春秋』

然る後に之を書し、以て齊の桓〔公〕の楚を攘いて伯（霸）功を成す所以を起こす……（『春秋宗朱辨義』卷三・莊公・十葉・「〔莊公十年〕秋九月、荆敗蔡師于莘、以蔡侯獻舞歸〔舞〕『殺〔梁傳〕』作〔武〕」条）。また、『春秋宗朱辨義』卷五・僖公・「〔僖公四年〕楚屈完來盟于師、盟于召陵」条に「……蓋し『春秋』の義は楚を攘うより大なるは莫し。齊の桓〔公〕の伯（霸）は召陵の盟より大なるは莫し。齊の桓〔公〕の楚を外にしてより後、中國内外の別を知る。晉の文〔公〕之に因りて起く。後世に至り、力以て楚を制するに足らずと雖も、未だ嘗て楚を制するを以て名と爲さざるにあらず。故に『春秋』召陵・城濮に于いて皆な詳しく之を序するなり」（『春秋宗朱辨義』卷五・僖公・十葉・「〔僖公四年〕楚屈完來盟于師、盟于召陵」条）。

⑤秦 周爵もて伯（霸）を稱す：『左傳』文公三年傳に「秦伯 晉を伐ち……遂に西戎に霸たり」。

⑥『春秋宗朱辨義』卷三・莊公・「〔莊公二十三年〕荆人來聘」条に「禮を以て來り聘す、既に州を以て舉ぐる可からず。又た爵もて名を書せずして荆人（荆という州の名で呼ぶのではなく、それに「人」をつける）と書する者もて、之を畧するなり。中國の諸侯に比するを得ず、史も亦た以て中國の諸侯と書せざる者もて之を書するなり。其の後の會・盟・侵・伐・交・政 既に久しければ、則ち其の來聘に於いては一に中國の諸侯と書するが如き者もて之を書す。諸儒 以て「之を進むと」爲す者は非なり。夫れ楚 豈に眞に義を慕い禮を修むるの實有らんや。張氏の「遠交近攻」の説 最も是なり。汪氏^{おみ} 以らく始めに「荆人」と書し、繼ぎて「屈完」と書し、然る後に「楚子使椒」・「楚子使薳罷」と書する者を以て、始めは則ち其の義を慕う^{よみ}を嘉し、繼ぎて則ち其の

義に服するに予し、其の浸(くみ)・中国を慕(しき)いて荐りに聘好(通好)を講ずれば則ち名を稱し・「人」と稱す。然らば「楚人使」と書するが如きは、宜しく「來獻捷」(a)と申ぶべし。豈に其の中国の諸侯を執えるを嘉し、其の君を人とし・其の臣を名いわんや(『春秋宗朱辨義』卷三・莊公・三十七葉～三十八葉・「[莊公二十三年] 荆人來聘」条)。

(a)『春秋胡傳』卷九・莊公下・「[莊公三十一年] 六月、齊公來獻戎捷」条に「軍 獲るを捷と口う。凡そ諸侯 四夷の功有れば、則ち王に獻じ、王 以て夷に警す……獻とは、下 上に奉るの辭なり。齊 山戎を伐ち、其の得る所を以て躬から來りて誇示す。「來獻」と書する者は、之を抑するなり……」とあり、『春秋宗朱辨義』はそれを引用し、「文定(胡安國)「獻捷は、書して以て之を抑するの義と爲す」と謂うは、極めて是なり」(『春秋宗朱辨義』卷三・莊公・五十三葉・「[莊公三十一年] 六月、齊公來獻戎捷」条)。

十八 五霸について、朱子は漢・趙岐の説と唐・丁公著の説とを併記している。ただし、朱子の『春秋』についての発言からみると、漢・趙岐の説を主としているように見える。だが、その意味するところからすると、唐・丁公著の説を正しいと考えるほうがよいのではないだろうか。

五伯(覇)なる者は、趙氏(漢・趙岐)曰く、「齊の桓[公]・晉の文[公]・秦の穆[公]・宋の襄[公]・楚の莊[公]なり」(『孟子』・告子下・「孟子曰、五覇者」)、と。丁氏(唐・丁公著)曰く、「夏の[時代の] 昆吾[氏]・商の[時代の] 大彭[氏]・豕韋(韋)[氏]・周の[時代の] 齊の桓[公]・晉の文[公]なり」(『孟子』章句・告子下・「孟子曰、五覇者」朱注所引)、と。朱子『孟子』に註し兩つとも其の説を存す。〔朱子が〕『春秋』を説くに至りて、「春秋の初めの間は、王政 行なわれず、五伯(覇) 扶持し方に統屬(統括すること)有り」①と云い、又た「春秋の時、五伯(覇) 迭(こも)ども興り、桓[公]・文[公] 盛んなりと爲す」(『孟子』章句・離婁

下・「其事則齊桓・晉文」条の朱注）と云うが如し。則ち専ら趙氏（漢・趙岐）を主とするに似たり。[そこからすると朱子の] 其の意 或いは皇・帝・王・伯（霸）を以て世道の升降^{あろ}を見わすも、湯の前に已に昆吾[氏]有り、文[王]・武[王]の前に已に大彭[氏]・豕韞（韞）[氏]有るに應ぜず。伯（霸）にして王、王にして伯（霸），相い^{まじ}開えて興るのみ。然れども秦の穆[公]

未だ諸侯の事に合うこと有らず・宋の襄[公] 伯（霸）を争いて師 敗れ、身死す・楚の莊[公] 王を僭[称]す。聖人 正に楚を攘^{はら}うを以て[齊の]桓[公]・[晉の]文[公]を許し、必ず楚の莊[公] 以て伯（霸）を予えず。恐らくは當に丁氏（唐・丁公著）の列する所を以て是と爲^ぜすべし（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・十葉～十一葉）。

①『朱子語類』卷八十三・春秋に「……初めの間、王政 行なわれず、天下 都て統屬無し。五伯（霸） 出で來り扶持するに及び、方に統屬有りて、「禮樂征伐、諸侯より出づ」（『論語』季氏）……。淳。義剛錄云、……見得其初王政不行、天下皆無統屬、及五伯（霸）出來如此扶持、方有統屬……」（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

十九 『春秋』を読むには『左傳』に基づかざるを得ない⁽¹⁾。しかし、往々にして經の記述と食い違うところがある。これまでの儒者たちは、そこに筆削・褒貶・予奪の意味があるとするが、それは『春秋』の主旨を逸脱している。程頤が「傳を以て經の事跡を攷え、經を以て傳の眞僞を別つ」と言うのが正しい。經と傳とに異同があってもかまわない。經で明白になっているのであれば、傳で異なっていようが一概に間違いとすべきでない。

『春秋』を読むに左氏に事うるを攷えざるを得ず。朱子 曰く、「左氏 説き得たる『春秋』の事は、七八分の固より當に信すべき有り」（『朱子語類』卷八十三・春秋）、と。[朱子がいうように] 其れ信ず可き者なり。但だ經と牴牾する者有り。經の諸侯の爵を擧げ、左氏 以て「大夫」と爲すが如し、經「人」と稱し、左氏 以て「諸侯」と爲すが如し、又た「侵」・「伐」・「圍」・

「入」・「取」・「滅」の類の間に合わざるが如きは、諸儒 徃徃にして之の據りて以て聖人の筆削・褒貶・予奪の義の在る所と爲すは、殊に之を失う

✓ (1) 『春秋』三傳について、朱子は、『左傳』は功利の説を述べ、『公羊傳』・『穀梁傳』は、見識が浅薄(陋)ではあるものの好いところもあると言う。

『左氏傳』は是れ箇の博記の人の做し、只だ是れ世俗の見識を以て它の事を斷當す。皆な功利の説なり。『公[羊傳]』・『穀[梁傳]』陋(見識が浅薄)なりと雖も、亦た是なる處有り。但だ皆な傳聞に得、訛謬多し。德明①(『朱子語類』卷八十三・春秋)。

①廖德明は、六次にわたって師事している。(a) 乾道九年(一一七三) (b) 淳熙五年(一一七八)前後(c) 淳熙十三年(一一八六)前後(d) 紹熙二年(一一九一)頃(e) 紹熙四年(一一九三)頃(f) 慶元五年(一一九九)末頃。

また、『左傳』の見識は甚だ卑し」として次のように述べる。

『左傳』の見識 甚だ卑し。趙盾 君を弑するの事を言うが如きは、却って「孔子 之を聞きて『惜しいかな、境を越えれば、乃ち免れんを』」①と云う。此の如きは則ち専ら是れ回避し便宜を占める者の計を得。聖人 豈に是の意有らんや。聖人 『春秋』を作りて、亂臣賊子 懼る(『孟子』滕文公下)。豈に反って之が解を爲して免れんや。端蒙②(『朱子語類』卷八十三・春秋)。

①『左傳』宣公二年・傳に「孔子 曰く、董狐は古の良史なり。法を書して隠さず。趙宣子(趙盾)は古の良大夫なり、法の爲めに惡を受く。惜しいかな、境を越えれば、乃ち免れんを」。

②程端蒙は、淳熙六年(一一七九)以降に記録を残す。程端蒙自身は紹熙二年(一一九一)に亡くなる。

そのうえ、『左傳』は義理に基づかないという。

左氏の病は、是れ成敗(成功と失敗)を以て是非を論じ、義理の正に本づかず。嘗て左氏は是れ箇の猾頭(狡猾)で事に熟し、趨炎附勢(阿諛追従・權勢に迎合する)の人なりと謂う。廣①(『朱子語類』卷八十三・春秋)。

①輔廣は四次にわたって師事する。(a) 紹熙五年(一一九四)一月から四月初旬(b) 同年十月二日から閏十月二十一日(c) 慶元三年(一一九七)十二月から翌四年(一一九八)一月(d) 慶元五年(一一九九)秋冬の間。

そして、『左傳』は史學であり、『公羊傳』・『穀梁傳』は經學であるとする。

……三傳を以て之を言えば、『左氏』は是れ史學なり、『公[羊傳]』・『穀[梁傳]』は是れ經學なり。史學とは、記し得て事却って詳し、道理の上に於いて便ち差あり。經學とは、義理の上に於いて功有り、然れども記事多く誤れり……端①(『朱子語類』卷八十三・春秋)。

①黄榘は、淳熙十五年(一一八八)に記録する。

史学であるので、『春秋』事実関係については、『左傳』の記述のよるべきだという。

『春秋』の書は、且に左氏に据らんとす。當時の天下 大亂にして、聖人 且に實に據りて之を書せんとす。其の是非得失は諸を後世の公論に付す。蓋し言外の意有り。必

なり。伊川（程頤）曰く、「傳を以て經の事跡を攷え、經を以て傳の眞僞を別つ」（『河南程氏遺書』卷二十・伊川先生語六・周伯忱錄），と。此の意

ず一字・一辭の間に於いて褒貶の所在を求むるが若きは、竊に恐らくは然らず……廣①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①輔廣は四次にわたって師事する。(a) 紹熙五年（一一九四）一月から四月初旬
(b) 同年十月二日から閏十月二十一日 (c) 慶元二年（一一九七）十二月から翌四年（一一九八）一月 (d) 慶元五年（一一九九）秋冬の間。

朱子の以上のような発言からすると、『左傳』よりも『公羊傳』・『穀梁傳』を評価していたように見える。ただし、『左傳』の史書としての価値は認めている。

では、『公羊傳』と『穀梁傳』とはどのように考えていたのだろうか。

『公羊〔傳〕』は説き得て宏大なること、「君子正〔道〕に居るを大とす」（『公羊傳』隱公三年傳に「故君子大居正。宋之禍、宣公爲之也」。何休注に「明修法守正、最計之要者」）の類の如し。『穀梁〔傳〕』は精細なりと雖も、但だ些か鄒搜（言いすぎ）狹窄（見識が広くない）なる有り。晉①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①黃幣は、淳熙十五年（一一八八）に記録する。

また、

『公羊〔傳〕』は是れ箇の村樸（素朴）の秀才なり。『穀梁〔傳〕』は又た較や點得（聰明で狡猾）なり。振①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①呉振の師事は、紹熙五年（一一九四）五月五日から八月中旬または下旬までの間。

ともいう。『穀梁傳』にくらべて『公羊傳』を少し優れていると考えていたように見える。胡安國の『春秋胡傳』については、「過當（妥當を欠く）の處有り」と言う。

胡〔安國〕の『春秋〔胡傳〕』を問う、と。曰く、亦た過當（妥當を欠く）の處有り、と。文蔚①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①陳文蔚は三次にわたって師事する。(a) 淳熙十五年（一一八八）から淳熙十六年（一一八九）四、五月頃 (b) 淳熙十六（一一八九）九月から紹熙元年（一一九〇）三月くらい (c) 慶元四年（一一九八）・五年（一一九九）。

ただ、「大義は正し」としている。

問う胡〔安國〕の『春秋〔胡傳〕』は如何、と。曰く、胡〔安國〕の『春秋〔胡傳〕』は大義は正し、但だ『春秋』は自ずから理會し難し……。友仁①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①郭友仁は、慶元四年（一一九八）に聞く所を記録する。

そして、強引なところがあるが、その議論は精神の活力を分合するものがあるという。

胡〔安國〕の『春秋〔胡傳〕』は牽強の處有り。然れども議論は精神を開合する有り。閔祖①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①李閔祖は三次にわたって師事する。(a) 淳熙十五年（一一八八）からおそくとも紹熙元年（一一九〇）四月まで (b) 紹熙三年（一一九二）から紹熙五年（一一九四）

最も好し。蓋し經・傳 異同有るに妨げず。經 既に書し得て明白なれば、則ち傳の疑悞する所と爲る可からざるなり（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・十一葉）。

二十 『春秋』の經文は、文学作品としてとらえることができる。事毎に見て行けば、事実関係に首尾が具わっている。ただし、『春秋』の一字や二字に褒貶がこめられているというのは認められないので、一字一句ごとに細かに見て行くと、精を極めることができず、全体像も把握できない。『春秋』は、その大義をとらえるべきで、一字を穿鑿すべきではないのである。

『春秋』の全經は合に看却って是れ一篇の文字なり①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。天王は是れ題旨（主題）、齊の桓〔公〕・晉の文〔公〕は是れ主意（主旨）、楚は是れ客意（第二の主旨）、魯は是れ線索（いとぐち）、鄭は是れ波瀾（抑揚があり変化に富んでいるもの）、宋・衛・陳・蔡・曹・許・滕・邾は是れ鋪襯（そえもの）、秦は是れ篇首の陪客（引き立て役）、呉は是れ結尾の陪客、會・盟・侵・伐は是れ關節（重要なポイント）、弑君・殺大夫は是れ議論（非難・批評）、朝聘・嫁娶は是れ聯絡（つながり）、郊・禘・蒐・闕・日食・星變・山崩・地震・水旱・螟・螽・麋・鵠の類（數）は是れ點綴（飾り・添え物）、其の間に起（引き起こす）有り、伏（ひそむ）有り、

四月まで（c）慶元五年（一一九九）。

朱子は、『四書集注』に胡安國の『春秋胡傳』を引用していることから、ある程度は評価していたように見える。ただし、朱子は、『春秋』の様々な解釈に対して信用しない。

問う、諸家の『春秋』の解は如何、と。曰く、某 盡くは信じ及ばず。胡文定（胡安國）の『春秋〔胡傳〕』の如きも、某 也た信じ及ばず。聖人の意裏は是れ此の如く説くを知り得るか。今、只だ眼前の朝報（官報）の差除（官職の任命）も、尚お未だ朝廷の意思の如何なるかを知らず、況や千百載の下に生まれ、千百載の上の聖人の心を逆推せんと欲するをや。況や自家の心 又た未だ聖人を得るが如きことならず、如何ぞ聖人の肚裏の事を知り得るをや。某の都て取て諸家の解を信ぜざる所以なり。除（もし）はれ孔子の還魂（復活）を得て親から説き出だすに非ざれば、如何なるかを知らず。側①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①沈側は、慶元四年（一一九八）以降に記録を残す。

轉（展開）有り、接（つながり）有り、串挿（貫き差し込む）有り、照應（呼応）有り、虚有り、實有り、景有り、情有り、排拏（意気盛ん）なる處有り、細密（細かい）なる處有り、警策（はっとさせる）なる處有り、閒散（的外れ）なる處有り、言外の言有り、意中の意有り、往復 窮まり無し、整齊（整う）漏らさず、義理 克實し、血脉 流通す。直ちに是れ千古第一篇の奇文なり。逐事折（事の折（段落）ごと）に看れば則ち事事 起結（始めと終わり）有り、開合（文の展開・まとまりなどの変化）有り。逐字句（字句ごとに）細かに看れば則ち一句一字 之を索めて、其の精を極むる能わず、之を推して其の大を盡す能わず。但だ須く其の大義の所在を得るべし。穿鑿す可からず。故に朱子 曰く、「雜うるに己の意を以てすれば則ち差舛多し」（『朱子語類』卷八十三・春秋）、と（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・十一葉～十二葉）。

①『朱子語類』卷八十三・春秋に「……問う、先生 既に『春秋』を解せず、合して亦た一篇の文字と作す、大意を略説して、後學をして指歸する所を知らしむ、と。曰く、也た此の如きを消もちいず。但だ聖人 經を作り、其の事を直述し、固より是れ抑揚する所有り。然れども亦た故意に一二字を増減するに非ず。後人をして一二字の上に就きて推尋し、以て吾が意旨の在る所と爲さしむるなり……」（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

このように張自超は、一で『春秋』は、仁義・王道を尊重し、功利・覇功を賤しめた。王法を明らかにしていることを理解できれば、『春秋』における褒貶の基準が分かる。そして、『春秋』は直書することで褒貶が示されているという。二で『春秋』は、歴史的な変遷をはっきり記述することで、天下を治める方法が示されているという。三・四で一字褒貶の否定、五で『春秋』には分からないところもあるという。六から十七にかけてこれまで褒貶が込められているとされてきた具体的な表現について、褒貶の意味がないという。十七で『春秋』は、

楚を中華の国として認めようとしなかったのではないかという、内外を区別していることに言及する。十八では五霸について、唐・丁公著の説を正しいと考えるほうがよいのではないかとする。十九では經と傳との記述の違いはさほど神経質にならなくてもよいとする。二十で、『春秋』を文学作品と見立てて、その技法を説明する。

では、続けて張自超の理解を通じて朱子の『春秋』観を検討してみたい。

(5) 張自超と朱子と

すでに検討したように、『春秋宗朱辨義』の序文で徐家祺は「大意は據事直書・褒貶自見の旨に本づきて以て綱領と為す」と言い、甥である劉毓嵩と邢紹中也「大意は朱子の據事直書の旨に本づ」いているとする。そして、『四庫全書總目提要』において四庫館臣たちも、「是の昔の大意は朱子の據事直書の旨に本づき」としている。

張自超自身も、

……蓋し聖人 意有りて以て褒貶を爲すに非ず。其の事に據り之を直書し、其の事 是^ぜなれば則ち其の辭 褒むるが若し、其の事 非なれば則ち其の辭 貶なるが若し……（『春秋宗朱辨義』巻首・總論・一葉）。

と述べている。おそらく張自超は『春秋宗朱辨義』を著述するにあたって、「據事直書（事に據りて直書す）」と「褒貶自見（褒貶 自^{あら}から見わる）」とを最も重視したのであろう。そのため、(4)で検討したように、張自超は「總論」の三・四そして、六から十七にかけて、一字褒貶について繰り返し否定を行なう。つまり、『春秋』は、書法上に褒貶を求めてはいけな^い。褒貶は、『春秋』に記された内容に存在し、書法にはないというのである。

しかし、「其の事に據り之を直書し、其の事 是^ぜなれば則ち其の辭 褒むるが若し、其の事 非なれば則ち其の辭 貶なるが若し」（『春秋宗朱辨義』巻首・總論・一葉）とすると、やはり「褒貶」を判断する「是」・「非」の基準になるものがないといけな^い。それが、張自超のいう「綱領」であろう。まず、

「綱領」とはどのようなものであるかを張自超は、朱子の発言を引用して、次のように言う。

朱子は則ち曰く、「『春秋』の大意の其の見る可き者は、亂臣を誅し賊子を討ち、内を重んじ外を軽くし（『朱子語類』は「内中國、外夷狄」に作る）、王道を貴びて伯（霸）功を賤しむのみ」（『朱子語類』卷八十三・春秋⁽²⁾）、と。これを識れば則ち『春秋』の綱領 得可きなり（『春秋宗朱辨義』卷首・自序・一葉～二葉）。

『春秋』の大綱は、亂臣・賊子を誅討し、夏夷の区分をはっきりさせ、王者を尊⁽³⁾んで覇者を賤しめることであると言うのである。

そして、張自超は、この仁義・王道を尊重し、功利・覇功を賤しめ、王法を明らかに、五伯（霸）の功績を記録しておくという「綱領」に通ずるならば、『春
(2) 張自超が引用した朱子の発言は次のようなものである。

『春秋』の大意の其の見る可き者は、亂臣を誅し賊子を討ち、中國を内にし、夷狄を外にし、王を貴びて伯（霸）を賤しむのみ。未だ必ずしも先儒の言う所の如く、字字 義有らざるなり。想うに孔子は當時 只だ足れ二三百年の事を備うるを要す。故に史の文を取りて寫^かきて這裏に在り。何ぞ嘗て某事に某法を用い、某事に某例を用うと云うや……閻祖①（『朱子語類』卷八十三・春秋）

①李閻祖は三次にわたって師事する。(a) 淳熙十五年（一一八八）からおそくとも紹熙元年（一一九〇）四月まで (b) 紹熙三年（一一九二）から紹熙五年（一一九四）四月まで (c) 慶元五年（一一九六）。

同様に朱子は、

……誼を正して利を謀らず、道を明らかにして功を計らず、王を尊びて伯（霸）を賤しむ、諸夏を内にし夷狄を外にす、此れ『春秋』の大意。知らざる可からず。此れ亦た先生の親筆なり。道夫①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①楊道夫は、淳熙十六年（一一八九）から紹熙三年（一一九二）に師事する。

といい、義や道をはっきりさせ、功利を考ず、王者を尊んで覇者を賤しめ、夏夷の区分をはっきりさせることが『春秋』の大意であるとしている。

(3) 『朱子語類』では「内中國を内とし、夷狄を外にする」となっているところを、張自超は「内を重んじ外を軽く」するに改めている。この夏夷の区分は、朱子が主張した『春秋』の綱領の一つであった。だが、張自超は「總論」の十七ですこし触れているだけである。できるだけ触れないようにしているように見える。これは、清の異民族支配の現実に配慮したものであろうか。また、清・康熙五十二年（一七一三）に李光地などが勅命を受けて編纂した『朱子全書』（朱子の著作を分類編集した編纂書）の卷三十六・春秋には、このような夷狄の区分についての発言は載せられていない。

秋』における褒貶が理解できるとする。これが『春秋』における価値判断の基準になるものであるというのである。

……朱子 曰く、『春秋』は仁義を貴とび、功利を賤しむ、王道を貴とび、伯（覇）功を賤しむ、と。又た曰く、『春秋』は王法を明らかにし、亦た五伯（覇）の功を廢せず」（『晦庵集』卷八十三「題趙清獻事實後」）、と。此れに通ずれば、則ち褒貶 知る可し。其の褒を貶に寓し、貶を褒に寓するの義 知る可し。蓋し聖人 意有りて以て褒貶を爲すに非ず。其の事に據り之を直書し、其の事 是なれば則ち其の辭 褒むるが若し、其の事 非なれば則ち其の辭 貶なるが若し……（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・葉）。

このように、張白超は、『春秋』は歴史的事実を直書する書物であり、そこに孔子の褒貶が示されているとした。そして、その褒貶は、仁義・王道を尊重し、功利・覇功を賤しめ、王法を明らかに、五伯（覇）の功績を記録しておくという『春秋』の「綱領」を判断基準とするものであるとした。また、一字・二字の書法を帰納して褒貶を導き出すという一字褒貶は繰り返して否定する。

これが張白超の理解した朱子の『春秋』解釈であった。張白超の説明しているところは、ほぼそのとおりであろう。ただ、朱子は、『春秋』作成の意図にはよく分からないところがあるという発言も行なっている。そこで、張白超の理解を通じて朱子の『春秋』解釈を検討してみたい。

そもそも、孟子の『春秋』についての説明には、

世衰道微，邪說暴行有作，臣弑其君者有之，子弑其父者有之，孔子懼，作『春秋』，『春秋』，天子之事也，是故孔子曰，知我者，其惟『春秋』乎，罪我者，其惟『春秋』乎（世 衰え道 微にして，邪說暴行 有た作る，臣にして其の君を弑する者之れ有り，子にして其の父を弑する者之れ有り。孔子懼れて、『春秋』を作る。『春秋』は、天子の事なり，是の故に孔子 曰く，我を知る者は、其れ惟だ『春秋』か、我を罪する者も、其れ惟だ『春秋』か、と）（『孟子』滕文公章句下）⁽⁴⁾。

というのがあり、朱子は次のような注をつけている。

胡氏（胡安國）曰く、仲尼『春秋』を作り、以て王の法を寓す。典を厚くし、禮を庸い、徳（有徳なる者）に命じて〔秩序づけ〕、罪を討〔ちて賞罰をはつきりさせた〕。其の要は皆天子の事なり。孔子を知る者は、此の書の作らるるは、人欲の横流するを遏め、天理の既に滅するを存し、後世の爲に慮至りて深遠なりと謂う。孔子を罪する者は、以て其の位無く二百四十二年南面の權に託して、亂臣賊子をして其の欲を禁じ肆にするを得ず、則ち威えしむと謂う。愚 謂えらく、孔子『春秋』を作り以て亂賊を討つは、則ち治を致すの法もて萬世に垂らす。是れ亦た一治なり、と（『孟子』滕文公章句下）。

- ✓（4）明の張居正の『四書直解』はこの部分を朱子の注に基づき次のように直解している。
- 「有作」の「有」字は、「又」字と同じ。孟子 上文を承け〔以下のように〕説う。周文・武・周公より以來、天下 已に治まる。又た世を傳うること既に久し、平王 東遷の後に至り、國運 漸く衰えて振るわず。王道 亦た湮にして明らかならず。是に于いて紀綱 紊亂し、風俗 陵夷し、邪説 暴行す。又た之に乗じて、其の大道無道の極を作し、臣を以て君を弑する者 之り有り・子を以て父を弑する者 之り有るに至る。天理滅絶し、「彝倫（不變の道理）の數（やぶ）れたる攸なる」（『書經』洪範）こと此の如し。是れ世の一大亂なり。孔子の生まるるや其の時に當り、既に君師の位を得ず。〔そこで〕賞罰の權を操し、以て其の「亂を撥め正に反す」（『公羊傳』哀公十四年）の術を施し、甚だしきは世道人心の爲に憂惧し、乃ち魯史の舊文に假りて『春秋』の書を作爲し、以て後世に教う。這の『春秋』の載せる所は皆な「王者の典を厚くし、禮を庸い、徳（有徳なる者）に命じて〔秩序づけ〕、罪を討〔ちて賞罰をはつきりさせた〕」の法なり。善を爲す者は褒むるは、是れ法の必ず賞する所・惡を爲す者は貶めるは、是れ法の必ず罰する所が如きは、乃ち天子の事なり。所以に孔子 自ら説うに、『春秋』の作らるるは、本より已むを得るに非ず。世の心を以てして我を知る者有れば、其の片言の間を以て 王の法を正し、君臣父子の倫をして大いに世に明らかならしむるは、其れ惟だ此の『春秋』なるかと謂う。世の迹を以てして我を罪する者有れば、其の匹夫の賤を以て天子の權に假り、黜陟賞罰の柄をして微言に托さしむるは、其れ惟だ此の『春秋』なるかと謂う。然らば則ち此の書の作らるるは、君子をして勤むる所有りて善を爲さしむ、則ち我を知るは固より深く幸いとする所なり。小人をして惧れる所有りて惡を爲さざらしむれば、則ち我を罪するも亦た辭せざる所なり。孔子『春秋』を作るの意は此の如し。治道を一時に興ずを得ずと雖も、治を致すの法をして萬世に垂れしむ。豈に天下の治に非ざるや（康熙十八年（一六七九）序・醉耕堂刻『重刻張閣老經筵四書直解』・卷十九・上孟・十八葉～十九葉）。

朱子の理解によると、孔子が『春秋』を作って「亂臣賊子を討」ったのは、後世に治世の法を示すためであるとなる。⁽⁵⁾

さらに、『朱子語類』では、聖人が『春秋』を作って善悪をはっきりさせ、「萬世不易の法」を示そうとした、と表現をかえて発言している。

……聖人『春秋』を作り、正に善を褒め惡を貶して、萬世不易の法を示さんと欲す……⁽⁶⁾ 莊祖^①（『朱子語類』 卷八十三・春秋）。

①李莊祖は二次にわたって師事する。(a) 紹熙三年（一一九二）から同五年（一一九四）四月 (b) 慶元五年（一一九四）晚歲前後。

すると、弟子の李莊祖と会話した時の朱子の意識の中では、「亂臣賊子を討つ」と「善を褒め惡を貶し」とはある程度重なって理解していたのではないだろうか。

他の儒者は、この善を褒め惡を貶しめる、もしくは亂臣賊子を討つということを、『春秋』の義例や一字褒貶に示されていると考えた。ところが朱子は、『春秋』の義例についても、「信ずる有る能わず」という。紹熙元年（一一九〇）

(5) 八股文作成のための参考書である汪鯉翔の『四書題鏡』（乾隆三十五年〔一七七〇〕刊）は、この節を次のように説明する。

此れ孔子の已むを得ざる處を見す。須く「懼」字を擒えるべし。當時 篡弑の禍あり、王法 明らかならざるを以て已むを得ずして『春秋』を作る。以て王法 明らかにす。或いは「知」、或いは「罪」は顧みざる所有り。正に孔子の當世を擔うを懼れ一片の苦心を道うを見す。○一治は正に『春秋』を作り以て王法を明らかにするの上に在りて見す。前の兩つの「治」は是れ一時の治なり、此の一治は是れ萬世の治なり（『四書題鏡』上孟・滕文公下・孔子節 条・十七葉～十八葉）。

『四書題鏡』によると、『春秋』は、王法を明らかにするために作られたと理解して、八股文を作成するようにという。恐らくこれが明・清時代を通じての理解であった。

(6) 『朱子語類』には、筆記した弟子の名前が記されており、そこから『朱子語類』の朱子の発言がいつなされたのかということは、ある程度判断できる。ただ、張自超はそうしたものをまったく考慮せずに、『朱子語類』から引用を行なう。拙稿も朱子の解釈を解明するのが目的ではなく、張自超の理解に焦点を当てているため、必要でないかぎり『朱子語類』の発言の年代は考慮しない。張自超は、発言の年代を考えず、朱子の著述・発言をひとまとめにして理解していたと考えるからである。ただ記録者の朱子に師事した年代を、田中謙二氏の『朱門弟子師事年攷』（『田中謙二著作集』第三巻・平成十三年・汲古書院刊）により記しておく。

に朱子は次のように書いている。

〔朱〕熹の先君子『左氏』の書を好み、毎夕之を讀み、必ず一巻を盡して乃ち寢に就く。故に〔朱〕熹幼く未だ學を受けざる時より、已に耳熟せり。長ずるに及びて、稍や諸先生の長ずる者に從いて『春秋』の義例を問う。時に亦た其の一二の大なる者を窺い、終に以て自ら其の心を信ずる有る能わず。故を以て未だ嘗て敢て輒ち一詞を其の間に措かず。而して獨り其の君臣・父子の大倫・大法の際に於いては感ずる有りと爲すなり……紹熙庚戌（紹熙元年〔一一九〇〕）冬十月壬辰、新安の朱熹謹しみて書す（『晦菴先生文集』卷八十二・「書臨漳所刊四經後 春秋」）。

朱子は、ごく小さい時より『春秋』に親しんでいた。長じて、『春秋』の義例についてたずねたものの、『春秋』の義例は理解できなかった。しかし、『春秋』の「君臣・父子の大倫・大法」については、思いを致したとする。このように朱子は、しきりに『春秋』の義例を否定している。

『春秋』の傳例 多く信ず可からず。聖人 事を記すに、安くに許多の義例有らん。伐國と書するが如きは、諸侯の擅興を惡む。山崩・地震・蝻・蝗を書すの類は、災異の自ら致す所有るを知るなり。徳明①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①廖徳明は、六次にわたって師事している。(a)乾道九年(一一七三)(b)淳熙五年(一一七八)前後(c)淳熙十三年(一一八六)前後(d)紹熙二年(一一九一)頃(e)紹熙四年(一一九三)頃(f)慶元五年(一一九九)未頃。

また、『朱子語類』に、

『春秋』 只だ是れ直ちに當時の事を載す。當時の治亂興衰を見わし、是れ一字の上に於いて褒貶を定むるに非ざるを要む……淳①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①陳淳の師事した時期は、紹熙元年（一一九〇）十一月十八日～紹熙二年（一一九一）五月二日と慶元五年（一一九九）十一月中旬～慶元

六年（一二〇〇）一月五日の期間。

といい、一字の上に褒貶を求めることも否定し、『春秋』は当時のことを直書してある書物だとする。そして、

……孔子は、但だ『春秋』を直書するに據りて、善惡 白^{あら}ずから著わる……^誤①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①周謨は三次にわたって師事する。(a) 淳熙六年（一一七九）、(b) 淳熙九年（一一八二）九月十二日から紹熙元年（一一九〇）三月末か四月初め、(c) 紹熙元年（一一九〇）四月二十九日から翌二年（一一九一）四月二十九ころまで。

というように、直書することで、褒貶が示されるというのである。

なお、「直書するに據りて、善惡 白^{あら}ずから著わる」については、朱子は次のような例を示している。

……問う、孔子の書する所の辭は嚴にして義は簡なり。若し三傳の詳しく事迹を著わすに非ざれば、也た筆削を曉り得るや得ざるや、と。曰く、想うに孔子 書を作りし時、事迹 皆な在りて、門人弟子 皆な他の聖人の筆削の意を曉る。三家 其の久しくして泯没するを懼れ、始めて之を書に筆す。流傳 既に久し。是^{こゝ}を以て訛謬無からずんばあらず。然れども孔子 已に自ら其の中に直書す。「夫人姜氏會齊侯于某」・「公與夫人姜氏會齊侯于某」・「公薨于齊」（桓十八年四月丙子）・「公之喪至自齊」（桓十八年四月丁酉）・「夫人孫于齊」（莊元年三月）と云うが如きは、此等 顯然として目に在り、傳無しと雖も、亦た曉る可し。且つ楚子の中國を侵し、齊の桓公 之と倣頭（真正面からぶつかる）して抵攔（抵抗）し、他（楚）を攔住（阻み）し、之をして侵すを得ざらしむ。齊の桓公 死し、又た晉の文公を得て攔遏住（阻止する）。[これは] 横流泛濫するも、硬く隄防^なを做すが如し。然らざれば、中國 爲めに滄侵さること必なり。此等の義、何ぞ曉り難からん、と……^備①（『朱子語類』卷五十五・孟子五 滕文公下）。

①沈憫は、慶元四年（一一九八）以降に記録を残す。

たとえば、魯の桓公夫人の姜氏の一連の行動を書き記すことで（直書）、その行為の善悪が示される。また、楚が中国を侵略するのを齊の桓公・晉の文公が防いだという事実を書くこと（直書）で善悪を示してあるというのである。なお、本稿(3)「衛人立晉」解でも検討したように、張自超は朱子のこうした観点から『春秋』全体を解釈する。

このように一字褒貶を否定し、直書することで褒貶が示されているとすると、直書された春秋時代の歴史の流れはどのようなものであったのだろうか。朱子は、それを次のように理解する。

『春秋』は、只だ是れ直ちに當時の事を載す。當時の治亂興衰を見わし、是れ一字の上に於いて褒貶を定むるに非ざるを要む。初めの間、王政行なわれず、天下すべ都て統屬（統括すること）無し。五伯（覇）の出で來り扶持するに及び、方に統屬有りて、「禮樂征伐 天子より出づ」（『論語』季氏）。後來の五伯（覇）又た衰えるに到り、政 大夫より出づ。孔子の時に到り、皇・帝・王・伯（覇）の道 地を掃う、故に孔子『春秋』を作り、他の事に據りて實に寫きて那裏に在り。人をして當時の事は是れ此の如しと見得せしむ、安くんぞ舊史を用うると舊史を用いざるとを知らんや……淳①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①陳淳の師事した時期は、紹熙元年（一一九〇）十一月十八日～紹熙二年（一一九一）五月二日と慶元五年（一一九五）十一月中旬～慶元六年（一二〇〇）一月五日の期間。

始めは王の政治が行なわれず、天下を統括するものがいなかった。それが覇者の出現によって、天下を統括して、「禮樂征伐 天子より出づ」の状態になる。後に覇者の権威が衰えるようになると、権力は大夫に移行した。そして孔子の時代には、皇・帝・王・覇の権威がまったくなくなってしまうとするのである。⁽⁷⁾

そして朱子は、綱領（朱子は「大旨」というが、拙稿は張自超の表現による）として、『春秋』に記された（直書された）歴史的な流れのなかから何を褒めて

何を貶めているかを導き出す。

『春秋』の大旨の其の見る可き者は、亂臣を誅し賊子を討ち、中國を内にし、夷狄を外にし、王を貴びて伯（霸）を賤しむのみ。未だ必ずしも先儒の言う所の如く、字字 義有らざるなり。想うに孔子は當時 只だ是れ二百年の事を備うるを要す。故に史の文を取りて寫きて這裏に在り。何ぞ嘗て某事に某法を用い、某事に某例を用うと云うや……^①（『朱子語類』卷八十三・春秋）

①李閔祖は三次にわたって師事する。(a) 淳熙十五年（一一八八）から遅くとも紹熙元年（一一九〇）四月まで、(b) 紹熙三年（一一九二）から同五年（一一九四）四月まで、(c) 慶元五年（一一九九）。

それは、亂臣・賊子を誅討し、夏夷の区分をはっきりさせ、王者を尊んで覇者を賤しめることであるとするのである。そして、一字一字に褒貶を示すことはなされていないと言う。

同様に朱子は、

……誼を正して利を謀らず、道を明らかにして功を計らず、王を尊びて伯（霸）を賤しむ、諸夏を内にし夷狄を外にす、此れ『春秋』の大旨。知ら

✓（7）朱子は、『左傳』を読む方法を尋ねられて、『左傳』に基づいて、春秋時代の歴史的な流れを次のように説明する。

叔器『左傳』を読むの法を問う。曰く、也た只だ是れ平心に那の事理・事情・時勢を看のみ。春秋の[魯の]十二公の時は各々同じからず。[魯の]隱・威（桓：宋・欽宗の諱を避ける）の時、王室 新たに東遷し、號令 行なわれず、天下 都て星散して主無し。[魯の]莊・僖の時、[齊の] 威（桓）・[晉の] 文 迭ごも伯（霸）となりて、政 諸侯より出で、天下 始めて統一有り。[魯の] 宣公の時、楚の莊王 盛強にして、夷狄 盟を主とし、中國の諸侯の齊に服する者は亦た皆な楚に朝し、晉に服する者も亦た皆な楚に朝す。[魯の] 成公の世に及び、[晉の] 悼公 出で來りて一番整頓し、楚 始めて退去す。繼ぎて呉・越 又た強く入り來りて伯（霸）を争う。[魯の] 定・哀の時、政 皆な大夫より出づ。魯に三家有り、晉に六公卿有り、齊に田氏有り、宋に華向有り。他ら肆意に做され、春秋の世を終えるまで、奈何も没し。但是し某 嘗て春秋の末は初年と大いに同じからずと説う……義剛①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①黃義剛は二次にわたって師事する。(a) 紹熙四年（一一九二）における半年、(b) 慶元五年（一一九九）から翌年はじめ。

ざる可からず。此れ亦た先生の親筆なり。道夫①（『朱子語類』 卷八十三・春秋）。

①楊道夫は、淳熙十六年（一一八九）から紹熙三年（一一九二）に師事する。

といい、義や道をはっきりさせ、功利を考えない。王者を尊んで覇者を賤しめ、夏夷の区分をはっきりさせることが『春秋』の綱領であるとしている。すでに検討したように、張自超はこの綱領を『春秋』における価値判断の基準としたのである。ただし、この点に関しては、朱子は張自超のように明快ではない。

朱子は、褒貶の判断の基準はどこに求めるかという点、先ずは『春秋』經の記述により、「先王の道」を用いて判断するとする。しかし、もうすこし複雑な是非の判断をしなければならなくなることもある。その時は、「平日の講明するの道理」を用いるという。

……『春秋』を読むの法を問う。曰く、它の法無し。只だ是れ經の書する所の事迹に據り、之を準折するに先王の道を以て、某は是^ぜ・某は非なりとす。某人の是^ぜなる底^{もの}は猶お未だ是^ぜならざる處有るがごとし、是^ぜならざる底も又た彼の此に善なる處有り、自ら道理を將^ちって折衷すれば便ち見（理解できる）る。『史記』を看るが如きは、秦の失う所以は如何・漢の得る所以は如何・楚漢 交々争い、楚 何を以て亡び、漢 何を以て興る。其の是非・得失・成敗・盛衰を爲す所以の者は何の故ぞや。只だ自家の平日の講明（学習して明らかにする）するの道理を將^ちって折衷し去き看れば、便ち見（理解できる）る。『春秋』を看るに亦た此の如し。只だ是れ聖人の言語 細密にして、人子 細かに斟量考索を要するのみ、と……^備①（『朱子語類』 卷五十五・孟子五 滕文公下）。

①沈憫は、慶元四年（一一九八）以降に記録を残す。

「先王の道」は、張自超が綱領としたものに繋がるものであろう。だが、朱子がここで言う「平日の講明するの道理」は、はっきりしない。発言に少し時間差があるが、朱子が次のように述べていることからすると、義理（哲理）である可能性がある。

張元徳 問う、『春秋』・『周禮』の難きを疑う、と。曰く、此等は皆な佐證無し、強いて説きて得ず。若し穿鑿し説き出だし來れば、便ち是れ聖言を侮る。且に義理（哲理）を研窮（詳細に調べる）するに如かず。義理明らかなれば、則ち皆な遍通す可し、と。因りて曰く、文字を見るに且に先ず明白にして曉り易き者を見るべし。此の語は是れ某 發出し來れば、諸公 記取す可し、と。時舉①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①潘時舉は三次にわたって師事する。(a) 紹熙四年（一一九三）(b) 同五年（一一九四）か慶元元年（一一九五）(c) 慶元二年（一一九六）六月に至る累月の間。

『春秋』・『周禮』は手がかりとなるものがないので、無理に穿鑿することができない。そこで義理（哲理）をはっきりすべきである。義理が明らかになれば理解できるとする。

「先王の道」を用いて判断するとしながらも、複雑なものになると「道理」をもちいるとする。そうすると、判断基準が、外的に存在する「先王の道」と内省によって会得される「道理」・「義理（哲理）」とに分かれてしまうことになってしまう。このように褒貶を判断する基準がはっきりしないということは、自分の哲学体系のなかに『春秋』解釈をうまく取り込むことができなかった、もしくは自己の哲学体系では『春秋』を説明しきれなかったことを意味するかもしれない。そこから、朱子の『春秋』はよく分からないところがあるとする以下のような発言が出てきたのかもしれない。

『春秋』は^{はなは}煞だ曉る可からざる處有り。泳①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①湯泳は、慶元元年（一一九五）に記録する。

また、

『春秋』は、某 ^{はなは}煞だ曉る可からざる處有り。是れ聖人 ^{まことよ}真箇に説くの話なるかを知らず。泳①（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①湯泳は、慶元元年（一一九五）に記録する。

などと述べ、聖人のものであるかどうかも疑う。

さらに、どうして『春秋』を顕彰しないのかと問われて、「實に看得ず（読んでも分からない）」からだと答えている。

問う、『春秋』一經は、夫子の親筆なれば、先生 此の一經をして天下後世に明らかならざらしむ可からず、と。曰く、某 實に看得ず（読んでも分からない）、と……^{紙①}（『朱子語類』卷八十三・春秋）。

①劉砥は二次にわたって師事する。(a) 紹熙元年（一一九〇）から下限は翌年四月末まで (b) 慶元元年（一一九九）頃。

先王の道が示されているはずなのに、それがはっきりしない。孔子自身の『春秋』についての凡例のようなものが存在すれば、朱子もよく分からないとは発言しなかったのではないだろうか。ただ『春秋』⁽⁸⁾經文のみで解釈してゆけば、孔子の意図ははっきりしてこない。どうしても内省的に理解しなければならなくなる。そのことを朱子は悩んだのであろうか。

それに対して、張自超は、朱子の学術上の權威が確立した後の人なので、朱子の発言を間違いのないものとして用いることができた。朱子の意見も孔子の意見と同じように自分の立論の基礎に持てくることができたのである。朱子の場合は、客観性のない自分の意見が、張自超にとっては孔子の発言と同じものになったのである。

以上、検討してきたように、張自超の『春秋』解釈は、忠実に朱子の理解を踏まえたものであったと言えるのではないだろうか。ただし、張自超は褒貶の判断基準を『春秋』の綱領にのみ求めたところが朱子と異なるところであろうか。朱子はそのまではっきりと説明しないからである。また、朱子は『春秋』をよく分からないとした。だが、張自超はそのことには言及しない。『朱子全書』（清・康熙五十二年〔一七一三〕）卷三十六・春秋にも、朱子のこの発言は収録されていない。

おわりに

張自超の次の世代にあたる錢大昕（雍正六年〔一七二八〕～嘉慶九年

〔一八〇四〕は、『春秋論』で、『春秋』を次のように述べている。

『春秋』は、善を褒め惡を貶めるの書なり。其の褒貶は奈何。其の事を直書し、人の善惡をして隠す所無からしむのみ。「崩」と曰い・「薨」と曰い・「卒」と曰い・「死」と曰うは、其の位を以て之が等を爲すなり。『春秋』の例は、「崩」と書し・「薨」と書し・「卒」と書し、而して「死」と書せず。「死」とは、庶人の稱なり。庶人 史に見るを得ず、故に未だ「死」と書する者有らず
①。此れ古今の史家の通例なり。褒貶の在る所ならず。聖人 意を以て之を改むる能わざるなり（『潛研堂文集』 卷二・論・一葉・『春秋論』）。

①陳澧（嘉慶十五年〔一八一〇〕～光緒八年〔一八八二〕）は、『東塾讀書記』で「然れども錢辛楣（錢大昕）が「史家の通例として未だ「死」と書する者有らず」「春秋論」と謂うは、則ち非なり」（『東塾讀書記』 卷十五・朱子）と言ひ、例を挙げて反駁している。

『春秋』は、褒貶を行なっている書物である。その褒貶とは、事実関係をはっきり書き、その善惡を明らかにするということである。「崩」・「薨」などの用法は、史書を書く上でのきまりを用いており、そこには褒貶はなく、聖人も意

✓（8）『資治通鑑綱目』凡例について宋の王柏（字は會之。浙江金華の人。宋・慶元三年〔一一九七〕～咸淳十年〔一二七四〕）が咸淳元年〔一二六五〕に書いた序文のなかで、『春秋』に施された筆削の跡が分からず、『春秋』についての凡例もない、そこから朱子は、『春秋』について様々に書かれた傳例を否定したという。

……昔、夫子『春秋』を作る。魯史の舊文に因るも、其の筆削の迹を見ず。正に以て凡例の證す可きもの無し。朱子 曰く、『春秋』の傳例 信ず可からざるもの多し、と（『朱子語類』 卷八十三・春秋）①。夫子の爲すに非ざるなり……有宋咸淳乙丑（咸淳元年〔一二六五〕）正月望、金華の王柏 書す（『御批通鑑綱目』・御批通鑑綱目卷首・三十二葉～三十三葉「王柏凡例後語」）。

①『春秋』の傳例 多く信ず可からず。聖人 事を記すに、安くに許多の義例有らん。伐國と書するが如きは、諸侯の擅興を惡み、山崩・地震・螽・蝗を書する類は、災異の自ら致す所有るを知るなり。德明（a）（『朱子語類』 卷八十三・春秋）。

（a）廖德明は、六次にわたって師事している。（a）乾道九年（一一七三）（b）淳熙五年（一一七八）前後（c）淳熙十三年（一一八六）前後（d）紹熙二年（一一九一）頃（e）紹熙四年（一一九三）頃（f）慶元五年（一一九四）末頃。

王柏は、朱子の『春秋』の傳例否定を、孔子がどのような観点から『春秋』を書いたのかという説明を行なうべき凡例がないことに求めている。

をもって書き改めることはできないという。

張自超の『春秋』にたいする見方も、この錢大昕と同じようなものであったのだろう。張自超はそこに価値判断の基準として、「仁義・王道を尊重し、功利・霸功を賤しめ、王法を明らかに、五伯（霸）の功績を記録しておく」を考えた。張自超はこれを用いて『春秋』の褒貶を解釈してゆくのである。